宇治　暗闇の祭り㈡

私説――宇治稚郎子　あるいは悲劇の一族

梅　山　秀　幸

漢江の岸べ

朝鮮半島の脊梁をなす太白山脈の北端，金剛山を濫觴とする水流が山間を西南に縫って濊貊の古都であったという春川（チュンジョン）を過ぎ，一方同じ山脈の南端の太白山に源を発した流れが忠州（チョンジュ）を通ってゆるやかに西北に進んで驪州（ヨジュ）の岸を洗い，まさに二頭の巨大な龍が相合うように南北二つの流れが相重なって，滔々たる「漢陽（ハンニャン）（ソウルの古名）ノ面水」（李重煥『択里誌』）となる。その慈しみあふれる母の乳腺，漢江の左岸，ソウル特別市江東区，今年オリンピック会場となった蚕室（チャムシル）一帯が百済の故地であった。石村洞（ソクチョンドン）を歩くと道路の両側に赤茶けた方壇形の大小二つの積石塚が姿を現す。三号墳と四号墳，その形式が北方のものと同じであることから，この王朝の主役が北からの亡命者であったという伝説を裏付けることになる。その背後ではさらにいくつかの古墳が発掘作業中で，墓域ということで放置されていたのがオリンピック直前になって退去を余儀なくされた「撤去民（チョルコミン）」と呼ばれる人々の家々の間に，雑然と古墳の石材が転がっている。そこから東へ歩いて，梧琴路（オグンロ）と可楽路（カラクロ）が交差するあたり，芳荑洞（パンイドン）にこんもりと小高い丘陵があって，今度は高麗芝の緑の鮮やかな数基の円墳が姿を現す。竪穴式石室墳よりは進んだ，羨道と玄室とを備えた横穴式石室墳であって，これらもまた百済王朝のごく早い時期の王族の墓だったのである。

大会本部のあるオリンピック公園は実は夢村土城（モンチョンドソン）であって，たおやかな稜線の与える印象を裏切って，本来は堀を前にした堅固な防御を誇る要塞であった。そうして北へ，漢江に近く，数メートルの高さの土塁が家々の建て込む繁華な町を突き切るように蜒々と続いている。ところどころ葱や胡麻や唐辛子の畑になっているが，15世紀以上前の建造物であることを考えると，保存状態は極めて良い。「国人を徴発して土を蒸して城を築き，内には宮室・楼閣・台榭などを作ったが，みな壮麗であった」（『三国史記』百済記）という，その姿からまた「蛇城」と呼ばれることもあった風納里土城（プンナンニドソン）である。

あるいは南へ，広州（クワンジュ）に足を伸ばす。400メートルあまりの山頂から稜線に沿って石塁が延びる。石塁そのものは朝鮮時代の修築であろうが，やはり百済時代からの山城である。「内ハ夷浅ニシテ，外ハ峻絶」（『択里誌』）であり，外から城を陥すのは難しく，内側に立て籠るのには便利な地形である。いわゆる朝鮮式山城の典型であって，城門をくぐると，中には中央を小川が流れ，田畑があり，人家があり，かつては九つもの寺院があったという。紀元前後から5世紀にかけて，漢江流域に百済という強国が栄えていたと考えてよい。遺物がそれをいかなる言説よりも雄弁に物語ってくれている。

高麗17代の仁宗23年（1145），王命を奉じて文衡金富軾が撰進した『三国史記』は，百済の建国について以下のような物語を載せている。

「朱蒙（ズム）が北扶余にいた時に生んだ子（瑠璃（ユリ））が来て，太子になると，沸流（ピル）と温祚（オンゾ）は太子に容れられないかも知れないと恐れて，ついに烏干・馬黎ら十名の臣下といっしょに南に向かって行った。（その時）ついて来た百姓は多勢であった。ついに（北）漢山に至って負児嶽（三角山）に登り，住むに適した地を眺めてみた。沸流は海辺に住むのを願った。十人の臣下はそれを諫めて『思いますに，この河南の地は，北は漢水を帯びており，東は高岳に拠っています。南は肥沃な沼沢が望まれ，西は大海に阻まれていて，その天然の険阻と地の利は（他に）得難い地勢であります。ここに都邑を作るのがよろしいでしょう』といった。（だが）沸流は聞かず，その

民を分けて弥鄒忽（ミズコル）（仁川）へ行き，そこに住みついた。温祚は河南慰礼城（アルザツ）に都を定め，十臣をもって輔翼とし，国号を十済といった。この時は前漢の成帝，鴻嘉三年（B.C. 18）であった。

沸流は，弥鄒忽の地が湿っぽく，水は塩からくて安居するには不適であったために戻って来て慰礼を見ると，都邑は安定しており，百姓たちは安らかであった。（ついに）慙じ悔んで死ぬと，彼の臣民はみな慰礼に帰附した。来る時，百姓たちは喜んでついてきたというので，後に国号を百済と改めた。その世系は高句麗と同じく扶余から出たために，扶余をもって姓氏にした。」（金思燁訳『三国史記上』〔六興出版〕により，若干手を加えた。）

ここにはすでに神話の要素は希薄で，歴史の段階を獲得しているといってよいであろう。異説もあるが，少しこの百済建国伝説を補ってみよう。扶余の地の話である。河伯の娘の柳花は幽閉されたが，日光と交わって5升ほどの大きさの卵を産んだ。その卵から生れた朱蒙は矢をよく射，知略にすぐれていた。扶余の他の王子たちの嫉妬を買った朱蒙は南へ逃れ，高句麗を建てた。朱蒙は高句麗の始祖東明王である。その地の女と交わって，沸流と温祚の兄弟が生れるが，北から異母兄の瑠璃が父の東明王を尋ねてやって来て，高句麗第2代の王となった。そこで沸流と温祚は仕方なくまた南の方へと逃れたというのである。その温祚が百済の始祖となるわけで，高句麗王家の姓は高氏であり，百済王家の姓は扶余氏または余氏であるが，どちらも世系は扶余なのである。ついでにいえば，戦前，喜田貞吉も日本の天皇家は扶余であるといい，戦後の画期であった江上波夫氏の「騎馬民族征服王朝説」も同様に天皇家の出自は扶余だとしている。現在韓国でベスト・セラーになっている金聖昊氏の『沸流百済と日本の国家起源』も天皇家は扶余であり，弥鄒忽に行った沸流の一派が南下し，さらには日本に渡ったのだとしている。これらについては後に検討することになろう。

温祚が「十済」を建国したという「前漢の成帝，鴻嘉三年」は紀元前18年に当る。この早い時期に朝鮮半島の西南部を占める広域な百済王国が成立

したとは考えにくい。3世紀後半に書かれた中国の正史である『三国志』魏書東夷伝は，例の卑弥呼の記事を含み，「邪馬壹」国の社会について詳しく書き記しているが，同じように朝鮮半島について初めて詳しい記事を載せている。それによると，北には扶余，高句麗，沃沮，濊があり，南には馬韓，弁韓，辰韓があった。東夷伝はそれぞれの国の政治体制，産物，習俗について記しているが，国の発展段階もまちまちであり，「夫余・高句麗が政治的にもっとも進んだ段階にあり，次から馬韓，辰韓，弁韓。そして最もおくれたのが沃沮と濊である」（金廷鶴氏『百済と倭国』六興出版）といった状況であった。扶余と高句麗とは部族的統合を進めてすでに王国を形成していたが，南の馬韓，弁韓，辰韓はまだ部落連盟国家の段階を脱していなかった。倭人伝の記事を読むかぎり，倭も女王の「邪馬壹」国が盟主の地位をすでに獲得していたとはいえ，やはり部落連盟国家を形成していたに過ぎない。弁韓が12国，辰韓がまた12国，そして馬韓は54国の邑落の連盟によって成立している国家であった。『魏書』東夷伝の韓伝は馬韓を形成する54国をすべて列挙していて，その中には「伯済」が見える。この「伯済」が成長して馬韓54国を統合し，「百済」王国が形成されて行ったものと考えられる。したがって，『三国史記』に見える始祖伝説およびそれに続く百済の初期の歴史は馬韓邑落国家の中の「伯済」としてのそれであったと考えてよい。その舞台となったのが漢江流域であったのであり，漸次成長し，第8代の古爾王（234—285）のころに古代国家としての体質を整え，やがて第13代近肖古王（346—374）のころには古代征服国家として膨張政策を取るに至った。後に蓋鹵王が高句麗軍に捕われ，顔に3度唾を吐きかけられて殺害され（475），都を熊津（コムナル）（現在の公州）に移すまでの歴史の証言者として，ソウルから広州にかけての漢江流域におびただしい遺跡群は存在するのである。

いま何故，その古百済にこだわらなくてはならないのか。——実は百済は日本の古代を考える上で重要な国家であり，この稿で取り上げる宇治稚郎子とのゆかりも深いのだが，日本人学者たちの手によって，弁解の余地のない

蛮行というしかないが，無惨にもその歴史があらかじめ抹殺されているからなのである。

消し去られた歴史

仮名がまだ存在せず，漢字だけを使って日本語の文章を記すという曲芸じみた作業を経て書かれた本来容易に読めようはずのない古事記を，本居宣長は文字通り半生をかけて，緻密な言葉の研究を通して読めるようにした。その宣長の情熱を支えていたのは，古事記の持つすばらしい文学性に対する彼の理解力であったと思われる。ところで，20世紀になって，「漢籍心（からぶみごころ）」を持つものとして宣長が却けた日本書紀をも含めて徹底的な文献批判を行い，『日本古典の研究』という大部の書物にまとめた津田左右吉の情熱がいったいどこから来ているのか，まったく推測しにくい。津田は文学に感動するような性質の人ではなく，ひたすら「つまらない作り事である」ということを証明するために，古事記，日本書紀の研究を行ったように見える。たとえば，古事記の主題は，「畢境，女と酒と獵と兄弟爭ひとの外には無い」といい，また「女の話についていふと，つまどひも歌がきも一般の風俗であり，道中ゆきずりの女に懸想するのも，こもり妻にかよふのも，兄弟の女爭ひも，女の嫉妬も，人々の常に經驗してゐること，朝夕に遭遇し見聞すること」といって貶しめる。綿密な考証をそのまま本文に，読者に対する一切の慮りなく入れ込んでいて，決してたどりやすくない津田の文体に付き合うと，最後に足許をすくわれるように，空虚の中に突き落とされる。「歌があるからこそ，それそれに幾らかの變った色彩が見えるが，歌を除いてしまへば，何れも同じ，極めて平凡な，日常の些事である」，あるいは「これらの物語は，名を古の皇族に託して，ありふれた話柄を昔物語としたまでのものである」，さらには「先づ出石童女の物語を見るに，其のすぢは兄弟の戀爭ひに弟が勝ったといふだけのこと」といった批評の言葉の中には，

「何れも同じ，極めて平凡な」，「……としたまで」，「……といふだけのこと」といった津田独得の価値貶黜の言い回しが見られる。手はこんでいるが，王様は裸だといいたい子供の心理なのだろうか。ただ，つまらなければ黙っていればよいわけで，やはり津田の著作に対して桑原武夫氏がルナンの言葉を引いていったように，愛するもの以外について語ってはならないということのようである。

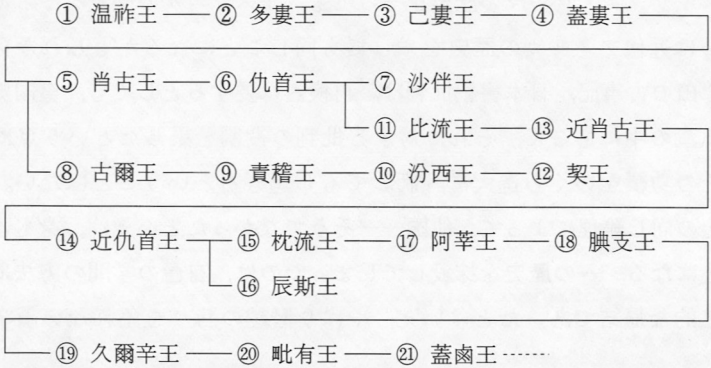
さて津田は，その文学性についてだけでなく，その歴史性についても，古事記，日本書紀に対して大鉈を振った。ここでもまた，「すべてが架空譚」，「實在の人物ではない」，「これらの記事はみな後人の製作」といった言い回しに到るところで出会うことになる。「神話」が理解と表現の最初の直観的な形式であり，そこでは事実と虚構とが区別されていないとすれば，「歴史」はそこから事実を引き出そうと努力することによって「神話」から分化したが，虚構的な要素を完全に排除することには決して成功しなかった。フランス語で〈histoire〉が歴史を意味し，物語を意味する理由もそのあたりにあるのであろう。それゆえ，津田が古事記，日本書紀の物語性について無理解を示したとき，その歴史性についての無理解も必然的に帰結していたのである。つまり物語の否定は歴史の否定をすでに内包していたといってよい。

大まかにいえば，津田は，応神天皇以後の古事記，日本書紀の記事はある程度信用できるけれども――だが，決して絶対ではない――，それより前の記事は史料としての価値を一切持たないと考えた。そう考える理由というのも，日本に文字が入って来たのは応神天皇のころのことであって，それ以後から世の中の出来事を書き記すようになったと考えられ，したがって，それ以前は出来事が文字に書き止めて伝えられたわけではなく，信用するに足りないというものである。この点についての批評はいまは差し控えよう。問題にしなくてはならないのは，津田が百済の古い歴史についても同じような理由から切り棄ててしまったことである。

「さて三國史記に見える契王以前の百濟に關する記事がすべて事實として

信じ難いものであり，それが後世の史家によって構造せられたものであること，そのうちに含まれてゐる肖古王と仇首王との名も（蓋鹵王と共に）實在の肖古王と仇首王（及び蓋鹵王）との名を此の構造せられた上代の國王の名とし，現實に存在した王には，それそれ近の字を冠せてそれと區別したものであることは，もはやいふにも及ぶまい。」（「日本古典の研究」『津田左右吉全集』第2巻，岩波書店）

ちなみに，百済の世系は次のようになっている。



『三国史記』百済本記，第13代の近肖古王（347—375）の代に，

「古記ニ曰ク，百済開国已来，未ダ文字ヲ以テ記スコト有ラズ。是ニ至ッテ博士高興ヲ得。始メテ書キ記スコト有リ。」

とある。博士高興の手によって出来事を書き記すことになったのが近肖古王代のことだから，それより前の記事は信用できないということなのだろうが，これは記紀批判における論理と同じである。ただ，『三国史記』が百済の歴史を紀元前にまで溯らせたのには，百済は早く7世紀に滅びているので，新羅の史官の手が加わっており，歴史の浅い新羅の紀元を古い時代に引き上げる以上，その兼ね合いで百済の歴史もそうするしかなかったのだと津田は考えている。

「百濟の建國（慰禮城奠都，帶方及び馬韓の領有）を前漢の鴻嘉三年に置

く以上，それと實際の建國との間には少くとも三百四五十年の溝渠が生ずるから，其の間に幾代かの國王を作らねばならぬ。溫祚王以後契王までの十二代は，かくの如き要求に應じて現はれたものではあるまいか。」（前掲「日本古典の研究」）

近肖古王が実際の始祖であって，温祚王から12代の契王までの存在は否定される。信用できないというのではなく，いなかったと断言するのである。ここでも読者は空白を突きつけられることになるが，津田の方法を取る限り，ギリシア・ローマの歴史をやっても，イスラエルの歴史をやっても，あるいは近代アメリカの歴史をやっても同じことになるかもしれない。ただ，津田の古事記，日本書紀批判は，再検討は要するとしても，皇国史観全盛の風潮の中にあって，それに対する批判の役割を果したという点において，その功績をいくら過大に評価してもし過ぎるということはない。しかし，その同じ論理によって，他国——そうでなかったといえば，身も蓋もないことになる——の歴史を抹殺してしまったのは，自己の学問の方法に従った必然的な帰結であったとはいえ，やはり僭越の誇りを免れない愚挙である。

真実を追求する自己の学的良心に従ったまでという弁明もありうるかもしれない。しかし，津田の朝鮮半島を見る眼が，当時の多くの日本人たちと同じように偏見に曇ったものであったことはどうやら否めないようである。

津田左右吉には古代音楽についていくつかの論文がある。その中の一つ「高麗楽考」において，津田は日本に雅楽として伝わり，左楽の唐楽と併称された右楽の高麗楽の成立過程を細かに考証している。そこで，津田は，高麗楽は高句麗から直接伝来したとされているが，そうではなくて，唐に渡ってそこで洗練されて唐楽とともにいっしょに中国から伝えられたものだと考えた。そうして，高麗楽の中で用いられる「高麗笛」も唐楽系統の横笛を流用したものとしている。その理由というのも，「高麗笛」というのは七声音階の旋律を吹くことになっているが，七声音階は中国でも漢代になってよう

やく現れ，日本の謡いものなどは現在に至るまで五声音階なので，「して見ると，文化の程度のさまで高くなかった高句麗の樂に七聲音階が具はってゐたとは思はれぬ」（『津田左右吉全集』第10巻，岩波書店）ということになるのである。遅れた国に進んだ楽器，進んだ音楽があったはずがないという，なんともあらけない議論なのである。当時の普通の日本人の持つ偏見から，この碩学にして自由ではなかった。

神話の抹殺
——檀君建国神話

少し寄り道をすることになるかもしれない。朝鮮史について日本人が触れることの意味を考える上で，過去の日本人の業績を，良くも悪しくも，多くの場合後者の方だが，無視できないからである。あくまで百済を念頭に置いて，しかし，他のトポスについても触れて置きたい。そうして，それらに鋭く対立するであろう，韓国，朝鮮の研究成果も取り上げながら，論を進めることにしよう。朝鮮半島はほんの隣近所だけれども，日本列島との間の溝は深い。日本と朝鮮とは歴史のいくつかの場面で舞台を共有している。しかし，それは決して同じ立場からではなかった。そのため，同じ一つの事件の解釈，というより，そこから喚びさまされる感情は往々にして正反対となる。あるいは，わかりやすい例を挙げると，一方の国で英雄，偉人としてもてはやされる人物が，もう一方の国ではしばしば極悪人となる。韓国において，豊臣秀吉は大盗賊であり，一方その秀吉軍を亀甲船（コブクソン）を操って撃退した李舜臣は長い韓国史の中でも希代の英傑として，到るところに銅像が立てられて尊崇されている。明治の元勲伊藤博文は日韓併合の首謀者として，好色な卑劣漢であり，彼をハルピン駅頭で射殺した安重根は義士として民族の誇りである。また，〈脱亜論〉といういびつな議論を偉大な思想家が唱えようはずがなく，福沢諭吉は冷酷で利己的で狡猾な日本人の代表であって，彼を紙

幣の肖像に使うのは，まさに「金権日本」の面目躍如ということになろう。おそらく日本人の中で韓国人が無条件で尊敬できる人物といえば幸徳秋水ぐらいのものに違いない。

京城大学と京都大学の教授を兼任した今西龍は戦前の朝鮮史学における権威であったといってよいが，彼も百済について津田説よりややゆるやかであるが，その歴史を引き下げている。

「歴史時代前の百濟王家の系圖は其王家に傳はりし始祖以來の祖名を列記し傳說を之に附記したもので，必ずしも半島に入って百濟國を建てた以後の王名ばかりではないと思ふ。責稽王（西紀 286—298）頃から帶方との關係も見え，傳說も事實らしいものが混じ，歴史の曙光がほの見え始めるが，眞の歴史年代に入るのは近肖古王からである。」（今西龍遺著『百濟史研究』国書刊行会）

今西には「日本へ半島から來たのは半島の文化ではない。支那の文化が半島を經由して來たにすぎないのである」（同）という実に明快な言葉があるが，こうした言葉が堂々と吐けるとすれば，彼の朝鮮史の研究に文化史としての期待を抱いてはならないことになろう。また神話は民族の魂であって，朝鮮人の精神のあり方を，その黎明期において象徴的に表現したものと考えられるが，今西龍はそれを切り棄てた。

「檀君神話」という古朝鮮の始祖神話がある。『三国史記』よりほぼ1世紀遅れて書かれた僧一然の『三国遺事』の神話を引用してみる。

「古記にいうには，むかし桓因（帝釈をいう）の庶子，桓雄はつねづね天下に対して関心をもち，人間世界を欲しがっていた。父は子供の気持を察して，下界の三危太白（三危は三つの高い山，太白はその中の一つ）を見おろしてみると，（そこは）人間をひろく利するに十分であったので，（その子に）天符印三個を与え，降りていって（人間世界を）治めさせた。（そこで）雄が部下三千を率いて太伯山の頂上（太伯は今の妙香山）の神壇樹の下に降りてきて，そこを神市と呼んだ。この人が桓雄天王である。

（彼は）風伯・雨師・雲師らをしたがえて，穀・命・病・刑・善・悪をつかさどり，あらゆる人間の三百六十余のことがらを治め教化した。

時に一頭の熊と一頭の虎とが同じ穴に住んでいて，いつも神雄（桓雄）に祈っていうには，『願わくは化して人間になりとうございます』。そこで，あるとき神雄は霊妙な艾ひとにぎりと，蒜二十個を与えて『お前たちがこれを食べて百日間日光を見なければ，すぐに人間になるだろう』といった。熊と虎がこれをもらって食べ，物忌みすること三七日（二十一日）目に，熊は変じて女の身となったが，虎は物忌みができなくて人間になれなかった。熊女は彼女と結婚してくれるものがいなかったので，いつも神（壇）樹の下で，みごもりますようにと祈った。桓雄がしばらく身を変えて（人間となって）結婚し，子を生んだ。名前を壇君王倹といった。

王倹は唐高（堯）が即位してから五十年たった庚寅（唐高の即位元年は戊辰であり五十年は丁巳であって，庚寅ではない。たぶん間違いであろう）に，平壌城（今の西京）に都し，はじめて朝鮮と呼び，また都を白岳山の阿斯達に移した。そこを弓（方とも書く）忽山，または今弥達ともいう。国を治めること一千五百年間であった。」（金思燁訳『三国遺事』〔六興出版〕による。）

韓国では一時期，正式な年号として檀君紀元が用いられた。『三国遺事』でなく，『帝王韻記』の記事を用いて檀君の建国を50年ほど早めて，西暦前2333年を元年としたものである。現在韓国の人が普通に「わが国五千年の歴史」という言い方をするのも，それによっている。大韓帝国が日本によって終焉を迎えたころ，羅喆（ナチヨル）は檀君神話を体系化して大倧教を創始し，盛んに布教活動を行った後，1916年檀君の聖地と信じた九月山の三聖祠で自決し，国に殉じた。その後，羅喆の衣鉢を受け継いだ大倧教の教団員たちは満州に渡って，独立運動の一翼を担った。檀君は民族共通の祖神として，独立運動のシンボルになったのである。勿論，厳密にいえば，朝鮮民族は韓・濊・貊という種族からなり，また高句麗・百済・新羅，そして伽耶がそれぞれに建

国神話を持っている。にもかかわらず，「世系亦自ラ檀君ヲ継グ」（『帝王韻記』）と人々は称することになる。檀君も最初は古朝鮮のある地域のある集団の支配者だったのであろう。それが死後その集団の祖先神として祭られるようになり，その集団が膨張し，また歴史の展開にともなって，統一新羅が出現するに及んで朝鮮民族共通の祖先神と考えられるようになったものと考えられる。神話の分析としては，たとえば韓国歴史学界の長老的な存在である千寛宇氏は，虎と熊をそれぞれのトーテムとする先住の漁猟民がいて，それに「天帝の息子」に率いられた農耕民である北モンゴル人が加わって，その両系の同化と混合によって韓民族の原型が出来上がった過程が反映されていると見ている（「古朝鮮에 관한 몇가지 問題」『新東亜』1987年5月号）。また李萬烈氏は，「檀君王倹」という名称について，「檀君」は「巫」を意味する方言の“당굴”（タングル），“당구리”（タングリ），または「天」，「拝天」を意味する蒙古語の“Tengri”と同じものとし，「王倹」は「大人」を意味する“음금”（ウムクム），“엉금”（オンクム）と同じ語だと考えている。したがって，「檀君が司祭的な性格を備え，王倹が政治的君長の役割を果したと見て，二つの役割を兼ねた檀君王倹という名から考えると，その社会は政治と宗教が分離していない祭政一致の社会であると見られる」（『韓國史大系2 三國』三珍社）と結論している。

科学的歴史学の立場を取ることから必然的に神話に対しては冷ややかな態度を取っている北朝鮮の『朝鮮全史』も檀君神話は決して無視できるものではないらしい。

「朝鮮人民は久しい昔から檀君神話を通して，わが国の歴史の悠久性について語り伝えて来た。それはこの神話に古朝鮮の建国過程が反映されているからである。

檀君神話は確かに幻想的な神に関する物語として編纂されているが，ここには古朝鮮国家の起源と古朝鮮国家を建てた住民，そして古朝鮮国家の初期の地域などが明らかにされている。それゆえ，檀君神話がつくりごと

としてまとっている神話的な外皮を剝ぎ取って，そこに反映された歴史的事実を選び取ることが，古朝鮮建国問題を明らかにするためには重要な問題となって来る。」（『조선전사 2 고대편（古代篇）』）

科学的な歴史学の立場からは，神話はむしろその生命でもある「神話的な外皮」を取り除いて，そこに「反映された歴史的事実」を読み取るという「反映主義」が貫徹されなくてはならない。それは逆に歴史的事実への徹底した「還元主義」といってもいいが，それでもなお檀君神話への愛着断ち難く，『朝鮮全史』においてすらなお檀君は民族統合という理念の象徴の座に居坐っているといってよい。

ところが今西龍は，檀君王倹は王倹城すなわち平壌地方の一地祇に過ぎなかったとする。高麗時代，朝鮮半島は蒙古の占領という未曾有の国難に遭った。その蒙古の圧政への反撥から，弱国である自らを慰めようとして，巫覡僧侶たちが粉飾して捏造したものを書き止めたのが僧一然の『三国遺事』の檀君神話であると今西は考えた。

「國家歴代の祖神を欲し，又民族開國の舊を誇りて自らを慰めんと欲する斯る時代に於て，平壌奠都の仙人王儉の縁起を作成して，之を當時に於て甚だしく尊信されたる帝釋の孫とし，檀君の尊號を奉りて，中華の聖帝堯と時を同じうして箕子以前に朝鮮を開創せりとなせる者は，實に時代の要求に適中せりといふべし。尤も此縁起の作者は偶然にも斯る縁起を作りしものか，或は時代の要求を知りて作りしものかは明ならず，恐くば前者なりしならんも，作者も亦かゝる要求ありし時代の一人たりし也。斯く王儉仙人に奉れる尊號が，解熱の靈藥たる檀なることは，實に之をして藥師神とせるものにして，流石に巫覡等の構成せしものなれば，賽錢の勘定も忘れざりしものなるべし。」（「檀君考」『朝鮮古史の研究』国書刊行会）

博引旁証，学問のあり方としては極めて実証的で良心的な道を歩んだかに見える今西龍のこの論考も，朝鮮民族の魂を蹂躙するものであるというしかない。この学者には珍しい，「賽錢の勘定も忘れざりしものなるべし」とい

った冗談は，とても笑えない。

「過去のある時期，日帝の御用史家たちは彼らの卑劣な政治的な目的から，檀君神話は僧侶たちがでっち上げた『荒唐無稽』として，歪曲抹殺して切り棄ててしまった。しかし，それは愚挙であった。檀君神話は古朝鮮人たちの手によって創作された古朝鮮の建国神話である。」（前掲『조선전사 2 고대편』）

失われた賢者の国
——箕子伝説

『三国遺事』は，上の檀君神話のあとに箕子伝説を続けて記している。今西の删除の手はこの伝説にも及んでいる。

「周の虎王（武王のこと）が即位した己卯の年（B.C. 813）に，箕子を朝鮮に封ずると，檀君は蔵唐京に移り，後に阿斯達にもどってきて隠れて山の神となった。寿命が一千九百八歳であったという。唐の『裴矩伝』には，高（句）麗はもと孤竹国（今の海州）であったが，周が箕子を封じて朝鮮とし，漢は三郡を分けて設置して，玄菟・楽良・帯方（北帯方ともいう）と称したといい，『通典』にも同じように述べている〔漢書には，真（香）・臨（屯）・楽（浪）・玄（菟）の四郡となっているが，ここでは三郡だといっているし，名称も同じでない。なぜだろう〕。」（前掲『三国遺事』）

箕子は殷の紂王の叔父にあたる。紂の暴虐に対して，「微子ハ之ヲ去リ，箕子ハ之ガ奴トナリ，比干ハ諫メテ死ス。孔子曰ク，殷ニ三仁有リ，ト。」（『論語』微子）とある殷末の「三仁」の一人である。周が革命によって古今を代表する妖婦の妲己に溺れて政を誤った紂を討ち，殷を滅して，「武王，箕子ノ囚ヲ釈（ゆる）ス。箕子，周ノ為ニ釈サルルヲ忍ビズ，朝鮮ニ走リ之ク。武王之ヲ聞イテ，因ッテ以テ朝鮮ニ之ヲ封ズ」（『尚書大伝』）ということになった。この伝説について韓国—朝鮮の人々は相反する複雑な感情を持っているよう

に思われる。儒教が国教であった朝鮮時代（「李氏朝鮮」，あるいは「李朝」という名称を使うことを韓国の友人にたしなめられた。李氏だけの朝鮮だったのではない。「李氏朝鮮」「李朝」という呼び方には日帝の下心がうかがえるという）には，孔子すらが「三仁」の一人としてその人格を称揚した箕子が自らの祖先だと考えるのは誇らしいことだったに違いない。平壌の牡丹峰（モランボン）にあったという箕子廟は敬虔に祭られた。しかし，外国からやって来た者が支配した，しかも，周の武王によって朝鮮に「封」じられた，つまり中国の「侯国」の一つだったと考えることは，朝鮮―韓国のナショナリズムを刺激し過ぎるようである。てっとり早く，金日成の箕子伝説への所見を引用してみよう。

「かつて，事大主義に身を潰らせた一部の御用学者たちは，『箕子』という外国人が数百人の技術者を連れて朝鮮にやって来て建国し，彼らがわが国の科学と文化を発展させたという根拠のないデマを編み出したのであった。」（김일성『주체사상에　대하여〔主体思想について〕』）

朝鮮民族が時として陥りやすい「事大主義」を最も排撃しなくてはならない目標とする金日成の「主体思想」が，たとえそれがいかなる賢者であったとしても，外国人による建国伝説を全面的に否認するのは当然といえば当然なのかもしれない。ところで，『易』に「箕子之明夷」という言葉が見える。「箕子ノ明夷（やぶ）ル」と訓んで，殷の箕子が紂王の無道によってその明を夷り傷つけられたという意味に過ぎない。今西龍は，狩野直喜に「易に箕子之明夷の語あり，これは東夷に關係ある語には非ざれども，人をして箕子と東夷とを連想せしむる語なる事を注意すべし」と教示されたといい，それをもとに「箕子が武王の爲に洪範を述べたる以後の事蹟に就きては，經史に所傳なきを以て，終に明夷の語より東夷を連想して，朝鮮にゆけりとの傳説を發生せしものゝ如し」（「箕子朝鮮傳說考」前掲『朝鮮古史の研究』）と述べている。箕子が朝鮮に行ったという事実を否定しているわけであるが，伝説も一度生れると自立して歩き始める。高句麗時代，都を箕子の故地と考えられる平壌に移

すとともに，箕子を地祇の一つとして奉祀するようになって，さらに高句麗を継承することを標榜した高麗時代，中国の文化の輸入に努めて箕子尊崇の風が強まり，箕子を祖先に持つことを誇りとするようになった，それを僧一然が書き止めたに過ぎないと，今西は考えた。もし，そうなら，そこには非文明的で野卑な統治者である蒙古に対する高麗の人々の反撥と自尊の念とが働いていたと考えられるが，今西の結論は「高麗と朝鮮の封建統治輩等が崇尚した〈箕子〉が古朝鮮に来たという説を広め，事大主義を助長したのである」という『朝鮮全史』（前掲）の見解とさほど変らない。しかし，今西の所論は，もし箕子伝説を信じるとすれば，箕子朝鮮は「漢民族の國にして，周の侯國なり，春秋戰國時代の列國の一たらざるべからず」という考え方の上に成り立っている。つまり「周の侯国」であるということについての評価が逆であり，そんなことはありえない，衛や晋や燕や斉や陳や宋や楚や秦などと肩を並べうるような強国だったはずはない，それほど先進的な国家であったとは考えられないというところに今西の議論は落ち着くのである。

ちなみに，北朝鮮の方では箕子の朝鮮移住伝説の事実性は否定されているわけだが，韓国の方ではどうなのか。千寛宇氏は，「箕子族」ともいうべき集団がいて，当初は山西省に住んでいたが山東省へと移動して，さらに大凌河の上流で「孤竹」という銘を持つ殷代晩期の礼器と「箕侯」という銘を持つ殷代末期から周代初期の礼器が出土していることから，遼西へと移ったと考える。さらに，箕子はこの移動過程の中で死ぬが，箕子族は箕子を祖先とする族団であるという血縁意識を維持したまま遼東へと進み，ついに大同江下流，つまり平壌付近に到着した。そうしてある時期，殷の末，周の始めからそれほど経過していない時期に，この地域の支配権を握って，檀君朝鮮に取って代ったのだと考えている（前掲「古朝鮮에 관한 몇가지 問題」）。韓国人の形成にはさまざまな要素が入り込んでいるという観点に立って，偏狭なナショナリズムにとらわれない，客観的で公平な箕子伝説の解釈であると思われる。

「日鮮同祖論」

日韓併合以後の日本の強圧的な植民地政策を正当化し，現在でも韓国の人々に臍を噛むような思いをさせているであろう「日鮮同祖論」という主張がかつてあった。金沢自身は無邪気至極な言語学者であって，主張そのものに悪意はなかったと信じたいのだが，当時の日韓情勢の中で果した罪過は測り知れないほどに大きく，その禍痕は深く現在にまで及んでいる。この問題はやりきれない。というのも，金沢自身には朝鮮半島の文化への尽きることのない憧れの念があって，当時の日本人が強制的に日本語を教えることはあっても，誰もが真面目には学ぼうとしなかった朝鮮語を真摯に学び，その半島への傾倒ぶりは，『朝鮮を思う』で朝鮮の芸術への思い入れを詩的に，やや感傷過剰気味に語った柳宗悦に決して勝るとも劣らないものであるからである。柳があまりに「悲哀の美」を強調し過ぎたことを批判されることはあっても――確かに横っ面をひっぱたいておいて，痛そうな顔をしているというようなものだ――，おおむね好意的に韓国の人々に迎えられているのに対し，金沢の書物は葬り去りたい忌わしい想い出であるに違いない。白樺派同人のようには善人面がうまくはなかったということなのだろうけれども。金沢のスサノヲがまず韓の新羅に天降り，曾尸茂梨（ソシモリ）の地にいた云々というやや幼い議論はここでは引くまい。もっと堂々たる態度を持った歴史家の「日鮮同祖論」を引用してみよう。

「しからばすなわち朝鮮民族は，日本民族と同一のものであって，それが中古以来政治上の差別から，言語・風俗・習慣・思想等において，異同を生じたものなるにほかならぬ。今やこの両民族は，関係の深かった古代の状態に戻って，相ともに同一国家を組織しているのである。もし朝鮮民族にして，漸次その多数に同化して，言語・風俗・習慣を改め，その思想を一にするに至らば，彼我の区別は全然撤廃せられて，渾然融和したる一大

日本民族をなすべきものである。」（喜田貞吉「朝鮮民族とは何ぞや」『喜田貞吉著作集』8，平凡社）

日本人と朝鮮人とが最も近い血縁関係にあることは動きようがない。それゆえ，「日鮮同祖論」を口にすることは，過去の経緯からいって嫌忌されるべきものだということは承知しつつも，民族の成り立ち，国家の成り立ちを考える上で，その趣意は再検討されるべきだと考えられる。ただ，問題なのは喜田の主張の後半部，朝鮮民族に同化を勧め，言葉を捨て，風俗，習慣を改め，日本人と思想を一にするがよいと述べているところにある。この論文が書かれたのが1919年，3•1独立運動が朝鮮半島全土に燎原の火のように燃え上がった年である。喜田貞吉はその古代の帝都論において，また法隆寺論争においてすぐれた着想力を示し，枠にとらわれない構想力の大きさにおいて他の国史学者に一頭地を抜きん出ており，また国内の被差別部落問題にも精力的に取り組んだ，極めて進歩的な歴史家であった。しかし喜田のように透徹した歴史家にしてこの躓きはいったいどこから生れるのか，筆者には説明できない。敢えていうとすれば，やはり日本人「御用史学者」だからだというしかないだろう。

喜田は優れた歴史家であったが，韓国で同じように「民族史学」の最高峰として尊崇を集めている丹斎申采浩は，1924年に次のような文章を書いている。

「強盗日本が憲兵政治・警察政治を励行して，わが民族の寸歩の行動も意のままにさせず，言論・出版・結社・集会の一切の自由を奪い，苦痛と憤恨があっても沈黙させ，幸福と自由の世界には眼を閉ざさせる。子女がいれば，『日本語を国語とし，日本文を国文とする』という奴隷養成所，すなわち学校に送り，朝鮮人として或は朝鮮史を読ませると称して，『檀君をおとしめて素戔嗚尊の兄弟』とし，『三韓時代，漢江以南は日本の領地』とする，日本の馬鹿者たちの書いたままを読ませ，新聞や雑誌を見ると，強盗政治を讃美する半日本化のための奴隷的文字だけに過ぎない……」

（「朝鮮革命宣言」『丹齋申采浩全集下』蛍雪出版社）

義憤の言葉にはそのまま訳しにくいものがあり，より穏当な言葉に置き換えたが，これは暴力革命の宣言であり，次のような言葉も出て来る。

「ここに暴力――暗殺・破壊・暴動――の目的物の大略を列挙する。

一，朝鮮総督およびその官公吏

二，日本天皇およびその官公吏

三，スパイ，売国奴

四，敵の一切施設物」（同）

天皇の弑逆を高らかに宣言したこの著者が韓国で最も良心的で，そして現在でも最も尊敬されている歴史家であることを日本人は肝に銘じて置いた方がよい。喜田貞吉と申采浩，同じ時代の歴史家でありながら，彼我の歴史家の立場の相違を際やかに見せてくれる。両者の間の溝は限りなく深い。

古代日本と朝鮮

たとえ，韓国の学者にとって「御用史学者」と一括して切り棄てられるものであるとしても，津田や今西や喜田の他にも，吉田東吾，白鳥庫吉，あるいは鮎貝房之進といった人々の朝鮮に関する研究の蓄積がわが国には確かにある。それらを無視することはできないが，それら日本人の手になる日本語の書物だけを頼りに論ずることは今や出来ない状況にある。外国人の方が客観的に見ることができるというのも一面の真理ではあろう。しかし，先に見たように，津田や今西の所論は純粋に客観的なところから生れたのではなかった。日本は韓国―朝鮮人による自国の歴史の研究を徹底的に阻害し，その研究の進歩を大幅に遅らせたが，やはり，当該国の研究者の声に謙虚に耳を傾ける必要があろう。まず，日本と朝鮮半島の関係について，韓国人としてもっともおとなしく，穏当な見解は次のようなものである。

「過去の日本の御用史学者たちの中には，彼らの国粋主義的な皇国史観に

立脚して，朝鮮史抹殺の力点をまず古代に置いた。そのため彼らは『日鮮同祖論』，『任那日本府説』などを捏造して，古代韓日関係の実相を隠蔽しようとした。しかし，考古学の発掘と皇国史観の漸退につれて，その実相が次第に明らかになり始めている。それを一言でいうと，『韓国文化の日本への一方的な流入』ということになる。」（前掲，李萬烈『韓國史大系2 三國』）

これは今西龍の「支那の文化が半島を經由して來たにすぎない」という，たぶん多くの日本人の考えを代弁する言葉に対して，痛烈な竹箆返しになるであろう。

もっとも日本人の中にも江戸時代には『衝口発』を書いた藤貞幹のように，日韓の文化の往来について客観的な認識を示していた人がいないわけではなかった。藤貞幹は，スサノヲは新羅で君主を指す「次々雄」，ニニギは同じく「尼師今」であり，皇統，言語，姓氏，国号，その他衣服や喪葬，祭祀などの習俗すべてにわたって，日本の古代文化は朝鮮，そして中国に由来することを指摘している。国学者たちがこれに対して猛反撥しないはずがなく，本居宣長はこれを「ひとへに狂人の言」として，貞幹の挙げた項目の一つ一つに論駁して『鉗狂人』を書いた。その一つ一つの論駁はともかく，次のような宣長の言葉には瞠目させられる。

「わが古學の眼を以て見れば。外國はすべて天竺も漢國も三韓も其餘の國々も。みな少名毘古那ノ神の何事をも始め給へる物とこそ思はるれ。されば漢國にてことごとしくいふなる伏羲神農黄帝堯舜なども。その本はみな此神よりぞ出テつらむを。かの國などには神代の傳說を失ひて。今に至るまで。この始めをしらぬこそいとほしけれ。」（「鉗狂人」『本居宣長全集』第8巻，筑摩書房）

少名毘古那ノ神をすべての，そして世界中の造物主と見なすこの宣長と貞幹とはどちらが狂人なのだろうか。しかし，宣長のこの狂気を日本人はずっと永い間持ち続けて来た，そうして今も持ち続けていることになる。

戦後間もなく現れた江上波夫氏の「騎馬民族征服王朝説」は，日本の成り立ちについて東アジアの動向と密接なつながりの中で論じた，一過性のセンセーショナルな扱い方を経て今読み返してみると，極めて穏当な議論のように思われる。江上氏の説は当初のものに傍証を加え，修正された部分もあると思われるが，東北アジア系の騎馬民族が，新鋭の武器と馬匹によって朝鮮半島南部を支配し，弁韓（任那（ミマナ））を基地として北九州に侵入し，さらに4世紀の末には畿内に進出して，そこに強大な大和朝廷を樹立したという骨格は変らないと思われる。江上氏は天皇の名をも特定していて，御間城（ミマキ）天皇と呼ばれた崇神天皇が任那から北九州に渡って来て，その後，応神天皇が北九州から畿内へ進出したと考えている。そうして，その王統も，『三国誌』の魏書弁辰伝に見える，弁・辰の12国を服属させ，流移の人で，馬韓の人でなく，そのため自ら立って王となることはできず，歴代馬韓の人に推されて王家を世襲したという，実に奇妙な家系である辰王家から出ており，扶余氏であるというのである（江上波夫氏『騎馬民族国家』中央公論社，1988年，第48版による）。

金錫亨氏の『초기　조일　관계　연구（初期朝日関係研究）』（邦題『古代朝日関係史』）も結論は江上氏のものと似ているといってよいかもしれない。『朝鮮全史4 中世篇』も金錫亨氏の著書と同じ見解を取るが，あるいは著者は同一人なのかもしれない。金氏の所論では二振の刀剣の銘文の解読が鍵になっている。たとえば，石上神宮の七支刀の銘文，

「泰囲四年囲月十六日丙午正陽造百練鉄七支刀囲辟百兵宜供供侯王□□
□□作囲世囲来未有此刀百済囲世囲生聖晋故為倭王囲造伝囲□世」

について，「泰和」は百済の年号で，5世紀のある年，火徳が盛んで刀を鍛えるのによい5月の「丙午（ひのえうま）」の日に，百回も鍛えた鉄で七支刀を作ったが，この刀は百種の軍隊を撃退することができ，「倭王」に与えるにふさわしいが，先世以来このような刀はなかった，それで百済では倭王のために作り与えるので，後世に長く伝えよ，と解読している。日本人学者

が，百済王が倭に服属のしるしとして贈ったとするところを，逆に百済王が属国の倭に下賜したと考えるのである。

また熊本県の江田船山古墳出土の太刀銘についても独自の解釈を示す。

「𤣥𠂤下𤣥□□□𤣥大王世奉𤣥典𠂤人名无利工八月中用大鋳釜并四尺𠂤刀八十練六十振三寸上好□刀服此刀者長寿子孫洋洋得三恩也不失其所統作刀者名伊太𤣥書者張安也」

金氏によると，この大意は「天下を治める……大王の世に大王の命令をたてまつる官庁の人，名前は无利が（指揮）してつくったものである。八月に大きな溶解釜を使った。四尺になる□刀を八十回も鍛錬して六十振三才をつくった。このすばらしい刀を身につける者は久しく生き，子孫も多いだろうし，三種類の恩恵をすべて受けるだろうし，彼が統率するところ（国）も失わないだろう。この刀を親しく作る者の名は伊太於で，文字を書いたのは張安である」ということになる。

この銘文中の「大王」を，日本人は日本の天皇，特に蝮宮瑞歯別大王，すなわち反正天皇と考えるが，金氏は百済の蓋鹵王だと考える。そうして，この文章全体に「大王」の高く持した姿勢と，この刀を受け取る者の臣属的な低い姿勢が見られ，帝王の臣下に対する言葉遣いとなっていて，この船山古墳出土の大刀も百済王が北九州の王者に，自分への臣属のしるしとして与えたものだとしている。金氏の論はさらに進んで，船山古墳の被葬者は百済人であって，北九州には故国の百済とは臣属の形を取った百済系統の「侯国」が存在していたとする。倭の地に朝鮮移住民集団がいくつかの分国を形成し，その中の百済系統のものが北九州から畿内大和に攻め込んだと金氏は考えているが，これは江上氏の論とそう相異はない。ただ，江上氏が畿内に攻め込んだのを4世紀末とするのに対し，金氏はそれを1世紀引き下げて5世紀末ごろのことだとする。

金聖昊氏の『沸流百済と日本の国家起源』（成甲書房）は韓国ではベスト・セラーになっているようである。百済建国伝説において，河南慰礼に都を定

めた温祚に対し，沸流は海に近い未鄒忽を選んで失敗し，慙じて死んだとなっていた。しかし，金氏によると，それは温祚百済側の主張であって，海辺に都を定めた沸流の百済は海洋国家として独自の発展をしたという。後に熊津に都を移し，錦江河口から西・南海岸に勢力を張り，後には日本列島にも植民地を持つようになった。沸流百済はまた『広開土王碑文』に「王躬率水軍討利残国」とある「利残国」であり，すると永楽6年（396），沸流百済は広開土王の軍によって滅ぼされたことになる。沸流百済の王は日本に亡命する，それが応神天皇だと金聖昊氏はいう。

江上波夫，金錫亨，金聖昊，3氏の説は破天荒の説に見えるが，それぞれ考古学や民族学，さらには文献史学，地名学の幅広い知見に立っていて，教えられるところが多い。それぞれがまた，たんなる文物の流れをのみ捉えているだけでなく，人の流れをも捉えている。朝鮮半島から九州へ，そして畿内へ，これらの説は，今やコンピューターを駆使した自然人類学の立場からも，さほど破天荒の説として退けることのできるものではなくなっているようである。

埴原和郎氏は，縄文晩期の人口を $N_0=75,800$ とし，7世紀の人口を $N_2=5,399,800$ とすると，この千年間の間に，毎年0.427％の人口増があったことになって，これは異常に高い数値であり，自然増加とは考えられず，多数の移住者がやって来たと考えざるをえないという。千年の間に漸次百万人以上の人々がやって来て，原縄文人と移住民系統の人口比率は，古墳時代あるいは歴史時代の初期の段階において，少なくとも西日本では，1対9，2対8だったとしている（埴原和郎「シミュレーションによる古代日本への渡来者の数の推定（英文）」『人類学雑誌』第95巻第3号，昭和62年7月）。圧倒的な渡来者の数であって，まさかという思いを消し去ることができないが，江上氏，両金氏の説に重みを加える数値になると思われる。

テレビ番組『失われた王国』

以上の古代日本と朝鮮半島との関係についての魅力あふれる学説を採用しつつ，その上に立って論を展開することは，残念ながら今は出来ない。日本の天皇家が扶余氏なのか，沸流の末裔なのか，興味は尽きないけれども，氏姓の特定はともかく，それぞれの論が古代日本と百済との密接な関わりを指摘していた。

話は逸れるが，今年（1988）の夏，韓国のテレビ局は『失われた王国』と題して，6回に亙って百済の歴史を放送していた。石上神宮の七支刀の謎，唐津沖の加唐島で生れたという斯麻王，すなわち武寧王の伝説，斉明天皇は義慈王を「わが兄」と呼び，また唐に連れて行かれて再び帰らなかった義慈王を偲んで，王が旅立った王留山で毎年「山有花歌」を歌いながら祭りが行われ，今も続いていること，古事記の編者の太安万侶は国と運命をともにした百済の武将の多臣父の子であるといった幾分かの虚構を混じえて，日本との交流を前面に押し出した番組であった。これが新羅の歴史であったなら，日本軍に対して「死して護国の大龍とならむ」といって，わざわざ海中に陵を作らせた文武王の物語などが出て，たぶん反友好的なものになったに違いない。百済の歴史はそれを免れるわけで，そうした番組が放映されたのも，オリンピック前の韓国の人々の心優しい配慮だったろうが，一般の韓国の人々にとって，日本と韓国がそんなに仲の良い時代があったとは到底信じられないという思いだったに違いない。ちなみに教科書でも当時の交流については教えていない。そこにも先入見が災しているが，百済滅亡の際にわざわざ日本軍が白馬江まで出兵し，唐・新羅連合軍に惨敗することなど――これもまた歴史の教科書は扱わず，一般の韓国人は知らない――，江上氏や両金氏の説が妙に説得力を帯びる x が日本と百済の間にあることは否定できない。

論点をしぼろう。応神天皇の時代，たとえばその8年，後に帰って王となる百済王子直支が修好のためにやって来た。14年，百済王は縫衣工女を日本に贈り，また弓月君がやはり百済から120県の民を連れてやって来る。そうして15年，百済王が良馬と阿直支という人物を遣したという記事が続いている。古代日本と百済との間の x の詮索はともかく，応神天皇の時代におけるこの活発な往来の背景はしっかりと押えて置く必要がありそうである。

文化のマキャヴェリズム

馬韓54国の中で漢江沿いに成長した「伯済」が膨張して馬韓を統一して行く。第8代古爾王（234—285）のころには百済は古代国家としての体制を整えていたものと考えられる。ただし，北朝鮮の『朝鮮全史』は第3巻から第11巻までを「中世篇」とし，三国時代の高句麗，百済，新羅などは「中世封建国家」と捉えて論じている。たとえば百済については，「百済封建国家の形成は人民たちの奴隷所有者的抑圧と搾取から逃れるための闘争から生れた歴史的な産物である」（『조선전사4 중세편』）ということになる。生産の主体が奴隷から農奴へ，それが古代から中世へのメルクマールとなる。しかし，ここではこの教条主義によらず，「古代」という言葉を使用することにしよう。漢，魏，晋と，中国では諸王朝の盛衰があったが，それにもかかわらず，朝鮮半島の楽浪，帯方は維持されていた。ところが，313年と314年，高句麗15代の美川王がこれを討って，永年の中国の支配を断ち切った。この楽浪，帯方2郡の滅亡はその後の朝鮮半島の政治情勢に多大な影響を及ぼすことになった。それまで楽浪，帯方が間にあったために緩衝地帯の役割を果し，高句麗と百済の直接対決は避けられて来た。しかし，楽浪，帯方がなくなって，高句麗は直接百済を圧迫し，さらにその力は新羅にまで及ぶようになった。ところが，高句麗は北方にも強敵を控えていた。342年，鮮卑

系の前燕王の慕容皝が自ら4万の軍を率いて南下し，高句麗を攻めた。故国原王は単騎で逃げたが，王母と王妃は捕えられ，さらに父王の美川王陵は曝かれた。慕容皝は府庫に納められていた累代の宝物を奪い，男女5万人を捕虜とし，宮室を焼き王城を破壊して，美川王の屍体とともに帰って行った。故国原王は父王の屍体と母を奪われるという最大の恥辱を味わったことになる。369年，前燕との和議を整えて国力を回復した故国原王は2万の兵を率いて百済を攻めたが，敗れた。371年，今度は百済の近肖古王が3万の兵を率いて平壌を攻め，故国原王は防戦するうちに流れ矢に当って死んだ。

東南の嶋峓にあって，新羅は高句麗や百済にやや遅れて，第17代の奈勿王（356—401）の代に入って，古代国家としての規模を備えたと考えられる。当時西の百済が強盛であったことは，新羅に高句麗とより密接な関係を結ばせることとなった。奈勿王の37年（392），高句麗の広開土王が使臣を新羅に遣した。奈勿王は新羅第二等の官位に当る伊飡の大西知の子である実智を人質として送った。『三国史記』によると，翌年の393年，倭軍が新羅の都を取り囲んで5日間解かなかった。奈勿王は都城の門を閉じて耐え，倭軍が撤退するところを追撃して，大いに破ったという。これは日本書紀の神功皇后紀，船とともに波が新羅国中を満たし，王が恐れわなないて降服したので，馬飼いとしたというまったく逆の記事に対応するのであろうが，そのことについては触れまい。ただ倭と新羅が敵対関係にあったことを把握すれば事足りる。

新羅と高句麗との盟約があって，高句麗はまた，前燕に取って代わった氐族の前秦とも結ぶ。高句麗17代小獸林王の2年（372），賢君として名高い前秦王の苻堅が使節と僧侶の順道とを高句麗に遣わして，仏像および経文を伝えたという。高句麗における仏教の初伝である。小獸林王は使臣をやって苻堅に感謝し，方物を貢いだというが，この年に高句麗は大学を建てて子弟の教育を始め，翌3年（373）には始めて律令を頒布したことになっている。これも前秦との交流がもたらしたものと考えられる。高句麗，新羅，そして

苻堅の前秦の友好関係が結ばれているのである。

それに対して，百済は江南の東晋と結ぶ。晋室南渡の後，ちょうど謝安や許詢や孫綽や王羲之が文人文化に花を咲かせていたころ，近肖古王の27年(372)と翌28年(373)，使臣を東晋にやって朝貢したという記事が見える。さらに，百済の仏教は，枕流王元年(384)，胡僧の摩羅難陀が東晋からやって来たのが最初とされる。前秦から入って来た高句麗のものとは系統を異にするわけである。文物の往来は文化史の問題にとどまらず，すぐれて政治的な，国際政治的な問題であることを銘記して置かねばならない。そうすると，次の記事の持つ意味ははっきりして来るであろう。応神紀の記事である。

「十五年の秋八月の壬戌の朔丁卯に，百濟の王，阿直伎を遣して，良馬二匹を貢る。卽ち輕の坂上の廐に養はしむ。因りて阿直岐を以て掌り飼はしむ。故，其の馬養ひし處を號けて，廐坂と曰ふ。阿直岐，亦能く經典を讀めり，卽ち太子菟道稚郎子，師としたまふ。是に，天皇，阿直岐に問ひて曰はく，『如し汝に勝れる博士，亦有りや』とのたまふ。對へて曰はく，『王仁といふ者有り。是秀れたり』とまうす。時に上毛野君の祖，荒田別・巫別を百濟に遣して，仍りて王仁を徵さしむ。其れ阿直岐は，阿直岐史の始祖なり。

十六年の春二月に，王仁來り。則ち太子菟道稚郎子，師としたまふ。諸の典籍を王仁に習ひたまふ。通り達らずといふこと莫し。所謂王仁は，是書首等の始祖なり。」（日本古典文学大系『日本書紀上』岩波書店）

「文字は人を殺し，霊は人を生かす」（「コリント人への第二の手紙」）というけれど，宇治稚郎子は日本人で始めて文字を学んだ。よほど優れていたのか，最初の個人教師の阿直岐では物足りなくなって，さらに優秀な博士の王仁をわざわざ求め，「諸の典籍」を学んだが，「通り達らずといふこと莫し」という有様で，すぐに理解した。古事記ではその書物を『論語』と『千字文』と特定する。知恵といえば古代呪術社会のそれ以上になかった社会に育って，

始めて高度な人間主義を唱える思想に触れた，この古代の日本のファウストは，ついには自殺をするに到る。文字は人を殺したのだ。すべて妄言だという津田の言葉こそ妄言だと思われる。津田の念頭にあった古代日本の像は東海の孤島の何ら夾雑物のない素朴な原始共同体であったらしく，その点，宣長の「明るく直く清き」古代像と変化はない。事実はもっとこみ入っている。前秦―高句麗―新羅の同盟に対抗するために東晋と組んだ百済はさらに大和とも結ぶ必要があって，自国でも貴重であった学者二人を大和へ送ったらしいのである。その二人から貪欲に知識を吸収した一人の皇子の姿がそこにはある。